ペアリング

捺未

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ペアリング

【Ｎコード】
Ｎ３０５０Ｄ

【作者名】
捺未

【あらすじ】
中学１年生の彩乃は本物の恋愛は知らない。ある日いつものように学校に行くと思いもよらない出会いに遭遇する。彼に出合った事で彩乃のこれからの人生が変わっていく・・・。

出会い

いつも通り彩乃は学校に行く。
今日は準備が早く終わったのでいつもより家を早めにでる事にした。
学校に着いて教室に入ってみるとまだ誰も居なかった。
早くきすぎてする事がなかったので廊下をうろうろする事にした。
一人で歩いてると向こうから男の子がこっちにむかって歩いてくるので近くに行って顔を見てみるとこの学校では見たことがない顔だった。
身長は多分１７０ｃｍはあるだろう・・・顔はクールで綺麗に整っていた。

私は普通にその人の隣をすぎようとしてすれ違うとその男の子は「待って。あんた何年？」と声をかけてきた。私はとっさに「あんたに、関係ないでしょ！」と言ってしまった・・・
その人は「なんだよこいつ・・・何年か聞いただけなのに！」と行って歩いて言ってしまった・・・
私は教室に向かう時あの人の事を考えていた。「なんであんな事言ってしまったんだろう・・・」とつぶやきながら歩いていた。でも同じ学年じゃないからもう会うことはないだろうと思って教室に戻ると私の親友である亜美と雪菜が来ていた。

廊下であった事を2人にはなす。
すると亜美が「今日うちらのクラスに転入生が来るらしいよー。」と言った。
彩乃はあの人のことを思い出した・・・。あの人じゃないよね？？
そんな事を思っていると雪菜が「その転入生ってもしかしてその人かもね。」と笑いながら言い出した。
亜美が突然「でももしホントにその人がこのクラスに転入してくる

なら彩乃の隣の席になるんじゃない??」と言った。
「えぇ!やだよー・・・」と彩乃が言った。
でも亜美がそう思うのは当たり前だと思う。
隣の人が居ないのは私だけだったから・・・。
そんな事を話ているとチャイムがなった。
チャイムと同時に入ってきたのは担任だった。
「今日は転入生が居る。」と担任は言った。
ホントだ・・・亜美の言う通りだ・・・・。
「中島入れ!」先生の声で転入生が入ってきた。
嫌な予感が的中したのだ・・・。
朝、廊下で会った人だ・・・。
「はじめまして!神奈川から来た中島有輝です。よろしくお願いします。」挨拶と同時に拍手が湧いた。私も一応拍手をした。
「中島の席は窓側から2列目の4番目の席だ。」先生は言った。
窓側の2列目の4番目の席って・・・私の隣の席じゃん・・・。
そう思ってるとそいつは隣に座っていた。
「お前、1年だったのか」と言って来た。
私は「ダメ??てかなんで隣なの?!」怒った口調で言う。
「ダメじゃないけど俺に言われても困るんだけど!てかなんでそんなに怒ってるわけ?俺なんかしたか?」
「べつにしてないけど。」と答える。
「なら普通にはなさね?隣の席なんだから仲良くしね?」と言ってきた。
「ぅん!ごめん・・・よろしくね」と言った。
「おう!お前、名前は?」と聞いてきた。
「彩乃・・・坂本彩乃・・・」
「彩乃かぁ・・・可愛い名前だな・・・」
「あ・・・ありがとう。」少し照れながら言った。
「じゃぁ彩乃って呼んでもいいか?」
「うん!いいよ!じゃぁ私は有輝って呼ぶー♪」

「おう！」
２人で話してるうちに１時間目が終わって休み時間になった。
休み時間になるといつものように２人は私の机の前に来た。
すると亜美は私の耳元で「朝話してた人って中島君？」と笑いながら聞いてきた。
私は「うん！」と答えた。
隣を見てみると女子がいっぱい居て有輝が囲まれて居た。
有輝がモテルのも分かる。
スタイルがよくて顔もかっこよくて・・・。
今日一日はそんな事を考えたりする繰り返しだった。
授業が終わって帰る準備をしていると「お前、何部？？」と聞いてきた。
「バレー部だけど。なんで？」と答えた。
「バレー部って男子でもあるの？」と聞いてきた。
確か、あったはずだと思ったので「あるよ」と答えた。
すると「じゃぁ男子バレー部に入るわ！」
私は一瞬えぇ！と思ったけど有輝が入りたいなら別にいいかなと思ったので練習してる体育管に連れていった。

「ありがとう。一応アド交換しねえ？？」と言ってきた。
「別にいいよ。」と私は答えた。
交換した後じゃぁねと言って別れた。

2人のやりとり

アド交換した夜
～♪～♪メールの新着のメロディーが鳴った。
送信者は有輝だった。
メールを開いてみると
【今日はありがとうな！】と書いてあった。
私はすぐに【ぅぅん♪いいよ。】と返信した。
返事はすぐ帰って来た。
【今日は疲れたからもう寝るな！また明日学校でな】
【ぅん♪おやすみ】と送ると返事は返ってこなかった。

次の日いつも通り起きると少しだるかったので1時間目は学校に行かないで2時間目から行くことにした。

有輝と亜美と雪菜と先生には2時間目から行くと伝えた。
1時間家で休んだら少しよくなったので学校に行く準備してるとピーンポーンと家のチャイムが鳴った。
誰かが来たのだ。
家には私しか居ないので私がでる事にした。
出てみるとそのに息を切らして立って居たのは有輝だった。
とりあえず有輝を家の中に入れた。
「なんでここにいるの？なんで家知ってるの？」と聞いてみた。
すると「俺の家と彩乃の家が近くだから知ってる」と有輝はあっさり答えた。
「で、なんでここに居るの？」と聞くと
「学校抜け出してきた。」と答えてきた。
「なんで抜け出したの？」と私は聞いてみた。
「だってお前体調悪いって言ってただろ？学校来る途中に倒れたら

大変だろ？だから抜け出したんだよ。」と答えてくれた。
有輝・・・ありがとう・・・心の底からそう思ったよ。
「ありがとう！」
「じゃあ今から学校に行こう。」と言って私の腕を引っ張って行った。

学校に着いて教室に入ると前から「「おはよ。大丈夫？？」」と聞こえた。
どこかで聞いた声だなと思ったら亜美と雪菜だった。
私は「おはよ♪大丈夫だよ♪」と答えた。
「ならいいんだけどさ～♪」と亜美が言った。

キーンコーンカーンコーン

「チャイム鳴ったから座ろ～」と雪菜が言った。
「うん♪また後でね」と言うと亜美と雪菜は笑顔で頷いてくてた。

授業が始まってもずっと有輝と話していた。
私はいつの間にか有輝と話してると自然と笑顔になっていた。
「お前、笑顔可愛いな！」有輝は笑顔で言ってくれた。
「な・・・何言ってるの。」と言ってしまった・・・。
私は内心嬉しかった。
「お前、顔赤いぞ？」と有輝が言った。
「有輝のせいで赤くなったんじゃん！」と怒った口調で言ってしまった・・・
「ごめん・・・」と焦った顔をしてすぐ誤ってくれた・・・。
「いいよ♪」と笑顔で私は返した。
そんな事を話してると授業が終わって皆が帰る準備をしてた。私も急いで準備をした。

喧嘩

帰る準備が終わって帰りの会をしてる時
「今日、一緒に帰らない？」と有輝に誘われた。
「いいよ～」と後から聞きなれた声がして振り返ると雪菜が居た。
「なんで先に答えるのー？？」
「だって彩乃が答えるのは断るんでしょ？亜美と雪菜と帰るからぁ。とか言ってさぁ。」
「わかったょー。今日だけ帰るょー・・・」
私は大きなため息をついた。
「ため息つくと幸せにげちゃうよ？？」
「もうあなたのせいで逃げてますからぁ・・・」
「何？？それひどくない？？」
有輝は苦笑いして言った。
「ホントの事でしょ？いつもいつも話しかけてきて・・・一緒に帰ろうとか・・・私達そんなに仲良くないのにさ・・・毎日疲れるんだって・・・・」
私は有輝の気持ちも知らずに言ってしまった。
「ごめん・・・彩乃がそんなに嫌がってるとは思わなかったんだ・・・ホントにごめんな・・・。俺・・・先に帰るね・・・また明日学校で・・・」
有輝はすごく悲しい顔をして帰って行ってしまった・・・。

有輝の事を考えながら家に帰った。
「ただいまー・・・」
「「おかえりー♪」」
お母さんと有輝のお母さんが仲良く話しをしていた。
私はなんで仲いいんだろう・・・と思いながら自分の部屋に行った。
ベットの上でごろごろしながら携帯を開いてアドレス帳にある有輝

の番号を指していた。
【今日はごめんなさぃ・・・言いすぎました・・・】
と打って送信した。
いくら返事を待っても返事は来なかった・・・。
次の日の朝になってもこなかった・・・。
有輝の事を考えながら学校に向かった。
すると有輝はもう学校に来てて友達と話をしていた。
「「彩乃おはよ♪」」
亜美と雪菜だった。
「おはよ」
と言って自分の席に向かった。
私が自分の席に座ろうとしたら有輝が立ち上がってどっかに行ってしまった・・・。
「やっぱり昨日の事怒ってるんだ・・・。」
私は誰にも聞こえないくらいの小さな声で言った。

告白・・・

有輝に避けられながら今日一日がおわった・・・。
次の日学校に行くと有輝は今日も先に来ていた。
今日は亜美と雪菜は学校を休むような事を言っていた。
自分の席に座ろうとした時、有輝がまた立ってどっかに行くのかなーって思った瞬間有輝に腕をひっぱられた。有輝は私の腕を引っ張りながら教室を出て行った。
「ねぇ・・・どこ行くの？てか腕いたい・・・」
「うるせぇ。いいから来い。」
と言って私が何を言っても無視をした。
あまり人が来ないプレハブで有輝の足が止まった。
何？？と思っているとその時、
・・・何か柔らかい・・・えッ・・・？？
き・・・キス？？
「い・・・いきなり何？？」
「俺・・・お前の事が好きだ・・・付き合ってくれねぇか？」
「えぇ・・？」
「俺・・・昨日一回もお前と話さないで居たときすごい悲しいって思ったんだ・・・それと同時に俺はきっとこいつの事が好きなんだ・・・って思ったんだ・・・」
「えッと・・・あのぉ・・・いいよ？」
と少し疑問系で返した。
「まぢで？やったぁ♪」ほんとに嬉しそうに笑って私を抱きしめてくれた。
「キスしてもいい？」
有輝は顔を赤くしながら聞いてきた。
私は「いいよ」と迷わず言った。
有輝は優しく私にキスをした。

「俺と付き合ってくれてあるがとう。」
有輝は笑顔で言った。
「いえいえ。私の事を好きになってくれてありがとう！」
私も笑顔で言った。
２人は色々話した後に手を繋ぎながら教室に帰った。

いじめ

手を繋ぎながら教室に入ると色んな人からの視線が感じた・・・。
「2人も付き合ってるの？」
亜美が私にニヤニヤしながら言って来た。
私が答えようとしてると有輝が
「そうだよ。ついさっき。」
と答えた。
「「よかったじゃん♪」」
亜美と雪菜が心から喜んでくれた。

それにしても皆の視線が気になる・・・
「なんでみんな私達を睨むような目でみてくるの？」
訳が分からない私は亜美と雪菜に聞いてみた。
「うちらのクラスの女子半分以上が有輝君の事好きみたぃなんだよね・・・それで2人が手を繋いで教室に入ってきたから怒ってるみたい・・・。」
「・・・え・・・」
「でも彩乃にはうちらが居るから♪大丈夫だょ♪」
笑顔で雪菜が言ってくれた。
「そうだよ♪」
雪菜に続いて亜美まで言ってくれた・・・。
私は・・・2人何もしてあげたれないのに・・・私は2人に助けられてばっかり・・・
皆からの視線を気にしながらも学校での一日が終わって靴箱に行って靴を履き替えようとした時、何か入ってる事にきずいた。
入っていたのは手紙だった・・・。
内容は
「あんた調子に乗ってんの？なんであんたが有輝君と付き合ってん

のよ！あんたなんかに有輝君は合わないのよ！有輝君に近づかないでよ。下手したら・・・分かるよね？」
私はこの手紙を読むのに夢中で後に居た有輝と雅紀と直希に気付かなかった・・・。
3人が私の手紙の内容を読んでる事も・・・
「彩乃？？」
「大丈夫？？顔色悪いよ？？」
私を心配して亜美と雪菜が話しかけてくれていたのにやっと気付いた・・・。
「ううん♪大丈夫♪」
私は2人に心配かけないように精一杯の笑顔をして言った。
そると有輝が「お前・・・何が大丈夫なんだ？？」
と言った。
直希も「この手紙・・・なんかやばくない？？」と心配してくれた。
それに続いて雅紀も「何かあったら俺らに言えよ？絶対に助けっから！」
「・・・あ・・・ありがとう・・・」
私は3人にありがとうしか言えなかった・・・
「「ちょっとその手紙見せて！」」
亜美と雪菜が言った・・・。
私は戸惑いながら見せることにした・・・。
「この字・・・麻実っぽくない？」
雪菜に見せながら言った。
「ホントだ・・・。てことはうちらのクラスの女子？！」
「うちらのクラスの女子ほとんど有輝君の事好きみたいだし・・・
それで有輝君と彩乃が付き合ってるから？」
雪乃に続いて亜美も言った。
「・・・」
私は何も言えなかった・・・。
「まぁ・・・俺らが守るから大丈夫だ！」

有輝はそう言って先に学校を出て行ってしまった・・・・。
有輝は歩くのが早くて追いつかなかった・・・。
私が家に着いて有輝の家に行くか行かないか迷っていた・・・
結局、有輝の家に行く事にした。
有輝の家は私の隣の隣の家だった。
有輝の家の前に着いた。
私はチャイムを鳴らした。
すると「有輝まだ帰って来てないのよ～」
と有輝のお母さんが出た。
「はい。わかりました」
「ごめんね～」
「大丈夫です」
ま・・・まだ帰って来てない？？・・・私より先に歩いてたのに・・・？ドコに居るの？・・・有輝の事ばかり考えて自分の家に帰った。

家に着いて自分の部屋に戻った。
15分後くらいに家のチャイムが鳴った。
またお母さんの友達だろうと思ってお母さんに出てもらった。
「彩乃～有輝君来てるわよ～」
ゆ・・・有輝・・・有輝君？？
私は急いで玄関に向かった。
すると息を切らした有輝が立って居た。
「彩乃！今お前に手紙を出した奴らのところ行って来たよ。あいつらお前をいじめないって言った。だから大丈夫だ。」
「あ・・・ありがとう。」
そういうと有輝は家に帰って言った。
私は有輝が帰った後すぐに眠りについた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3050d/

ペアリング

2011年1月9日07時21分発行